

## マタイ18章21-22節 「7の70倍の赦し」

### 1A 量より質

1B すべての罪

2B 神の恵みによる赦し

### 2A 罪の責め

1B 罪の対価

2B 責めるのは愛すること

### 3A 赦さない心

1B 十字架は神の義と愛の交差点

2B 心の監獄

## 本文

マタイによる福音書 18 章を開いてください。聖書通読の学びは、先週で 17 章まで来ました、午後礼拝で 18 章全体を一節ずつ学びます。教会生活に密接な話題をイエス様は弟子たちと話されますので、ぜひ参加して聞いてください。今朝は 21-22 節に注目します。「**21 そのとき、ペテロがみもとに来て言った。『主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。』22 イエスは言われた。『わたしは七回までとは言いません。七回を七十倍するまでです。』**」

18 章は、人につまずきを与えないこと、また罪を指摘して、悔い改めない場合にどうするのか？ということ、また罪を赦すにはどうすればよいのか？ということなど、主にあってどのように人々に恵みをもって接していくのかについて、学んでいきますが、ここは最後の部分、赦しについてであります。日本の人たちがキリスト者になると決める時に、イエス様が十字架で語られた言葉、「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。(ルカ 23:34)」との御言葉に感動して、イエス様を信じる人が多いような気がします。それだけ、赦しというものが、福音、良い知らせであると感じているからでしょう。裏返すと、私たちの生活や文化にそれだけ赦しが無いから、とも言えるかもしれません。

夏に、遊園地でお化け屋敷に行く人たちは多いのではないかと思います。小さな頃に鮮明に、強烈に覚えているのは「恨めしや〜」という言葉です。井戸から女の人が出てきて、「一枚、二枚、・・・」と言うお化け。これは、「恨む」という言葉から来ています。人に嫌なことをされた時に、相手を恨んで、その気持ちがずっと晴れずに生きていて、死んでもそれがなくならない、だから死んで出てきた、ということです。私たちの心のどこかに、自分な何か嫌なことをされた時の感情を、ずっとため込んで持っていて構わないという思いが、どこかにあります。ですから、イエス・キリス

トの福音、罪を赦すという使信があまりにも斬新であり、真新しい世界に思えるのでしょう。

### 1A 量より質

ここで、イエス様の弟子ペテロが、「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。」と聞いています。皆さんなら、何回まで赦することができるでしょうか？ペテロは、「七回まででしょうか？」と聞いています。ところで、赦すというのは、どういうことなのでしょう？預言者エレミヤが、新しい契約の約束を伝えた時に、こう言いました。「わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。(31:34)」罪を赦すというのは、罪を思い起こさないことです。持ち出さないといいのでしょうか？何かあれば、いつでも持ち出すことができるように心の戸棚に入れておくのではなく、そこから取り出して、ポイ捨てるということですね。もちろん記憶から消すということではないですが、つまりいたという思いを抱かない、支配されないということです。

それで何回まで、赦することができるでしょうか？当時、ユダヤ教のラビは「三回まで赦しなさい」とのことだったそうです。なので、ペテロが「七回まででしょうか」と尋ねた時に、それはそれは、寛大さを表しているものだったのです。七という数字には完全という意味合いもありますから、これで完全な赦しになるのでしょうか、という思いもあったことでしょう。

しかしイエス様は、言われました。「わたしは七回までとは言いません。七回を七十倍するまでです。」あらら、ですね。何を言っているのですか、イエス様？という感じですね。七回を七十倍…数えているうちに、あほらしくなって、「もういい、全部赦します」となることでしょう。そうすれば、赦しということのほうに自然になって、「何回赦したから、もう赦さない」という発想さえ浮かばないと思います。赦すということが、もう自分の一部になってしまうのです。

### 1B すべての罪

そもそも、「赦す」というのは、すべての罪を赦すから赦すことになります。「これこれの罪は赦しますが…」と言われたら、その時に赦された思いにはなれないでしょう。ほんの少しの躓きに対しても残さずに、すべてを赦すからこそ、赦しとなります。「Iヨハ 1:9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」すべての不義から清められるということです。

私が、ある学生のクリスチャンにこんな質問を受けました。「自分が思い出せる罪は告白できるけれども、意識にはない、知らずに犯した罪について告白しなかったら、赦されないのでしょうか。」私は、この箇所を読ませました。彼女は読んで、いつもよく読んでいるのでしょうか、「アーメン」と言っていました。私は聞きました、「どれだけ赦されるの？」「すべて」「そうだよ、意識にない罪も、その『すべて』に含まれるんじゃない？」そうすると、彼女は、はっきり分かって驚いていました。彼女

のように、心のどこか奥で、「私はまだ、神から赦されていないのではないか？」と思っているかもしれません。けれども、すべての罪を神は赦されたのです。そして赦しは、もう思い出さない、つまり全ての罪を赦すということです。

預言者エゼキエルが、赦しというのは数ではないことを、次のように話しています。「18:21-22 しかし、悪しき者でも、自分が犯したすべての罪から立ち返り、わたしのすべての掟を守り、公正と義を行うなら、その人は必ず生きる。死ぬことはない。彼が行ったすべての背きは覚えられることがなく、彼が行った正しいことのゆえに、彼は生きる。」これまで行なったどんな悪も、思い直して主に立ち返るなら、「すべての背きは覚えられることがない」と主は言われます。

その反対に正しい人はどうなるかも読んでみます。「18:24 しかし、正しい人が正しい行いから離れ、不正を行い、悪しき者がするようなあらゆる忌み嫌うべきことをするなら、彼は生きるだろうか。彼が行ったどの正しいことも覚えられず、彼が犯した不信と陥った罪のゆえに、彼は死ななければならない。」度の正しいことも覚えられないのです！ここまで神は徹底しておられます。今、自分がどうなのか？ということでもあります。自分が心を込めて悔い改め、主の前に出てきているのなら、神は過去の罪をすべて過ぎ去らせます。けれども、過去にどんな正しいことをしていたとしても、今が神から離れているのなら、全く過去の正しいことは彼の義とはなりません。神の前にへりくだって出て、この方と交わることが、神の願われていることであり、それを差し置いて過去の行った正しいことを話されても意味がないのです。ちょうど旦那さんが奥さんに、「これこれのことをしてあげたではないか！」と怒っても、たった今、聞いてあげていなかったら全く意味がないのと同じです。その反対に、どんなに過去悪いことをしても、今、それを悔いて、主の前に出て申し訳ないと思っているならば、その心こそが神は欲していたので、神の憐れみが溢れて、その人の過去は全て洗い流していただきます。

これが赦しですね。赦しがそのようなものですから、人が赦す時に、何回まで赦せばいいのだろう？という発想にはならないのです。

## 2B 神の恵みによる赦し

けれども、七回の七十倍とまで言われたら、参ってしまいます。ルカによる福音書では、一日に七回、赦しを求めて来るならば、赦しなさいとイエス様が言われて、「信仰を増してください」と使徒たちは頼みました。自分には到底できないと、当然ながら思うのです。矛盾するようですが、人が本当に赦す時というのは、「そんなの、赦せるはずがないじゃないの」という時かもしれません。確か、カトリックの修道女で渡辺和子さんが、凶悪な犯罪について、私が赦すとかそんなことではない、という言葉を残したと言われています。自分で赦せない、赦すとか悩んでいる間は、神の無尽蔵な赦しというものに気づいていないからそうなっているのかもしれない。

イエス様は、この後で、王に負債のある家来の喩えを話されます。その中に、一万タラントの負債のある者がいました。一タラントが六千日分の労賃です。その一万倍ですから、もう天文学的な借金です。それを返済しますと言っていますが、もうそこからして自分が負っているものを分かっています。返済しようがない負債、つまり自分の罪に対する対価を自分で償うことは到底できないのに、それをやろうとします。しかし、王は彼を赦しました。負債を帳消しにしたのです。ところが、自分には、自分に百デナリの借りのある仲間がいました。借金を返せといい、もう少し待ってくださいと言っているのに、なんと彼は、その仲間を牢に放り込みました。そのことをした主君は、「私がおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか。」と言い、彼を獄吏たちに引き渡しました。

この男の何が問題だったのでしょうか？あまりにも滑稽で哀れな話なのですが、その滑稽で哀れなのは、自分自身がどれだけ負債を帳消しにされたのか分かっていなかったことなのです。一万タラントの借金なのに、それでも返済しようとしていたのを見ると、自分がどれだけ負債を持っているかさえしなかったのかもしれない。つまり、これは自分がどれだけ罪を犯してきたかを知らない、また自分がその全ての罪を赦されたということを知らないのです。知らないから、自分に対して罪を犯した者がいると、その罪を犯したことだけに目を留めて、それで恨み、赦さないのです。イエス様の赦しなさいという命令は、実は赦せないという能力の不足が問題なのではなく、自分がどれだけ赦されたのか、神の自分に対する赦しを受け入れていないということです。神の命令を守れないのは、神の恵みを受け入れていないからだと言えます。神の愛をちょっとだけかじり取っているかもしれないけれども、しっかりと自分自身は保っているからだと言えるでしょう。圧倒的な神の恵みの世界があって、初めて七の七十倍を赦すというキリストの御業に入れます。

## **2A 罪の責め**

ここで、しばしば人間関係においても、社会問題においても、大きく間違えられた考えがあります。音が同じなので、同じ意味だと思っている人々がほとんどです。「赦し」と「許し」です。特赦とかに使われる「赦す」が、聖書で使われている言葉です。けれども、許可を意味する「許す」は使われていません。神は、罪を赦してくださいますが、決して罪を許されません。漢字が違うのに、音が同じなので、意味までも混同している人が多いのです。

例えば、家庭内暴力を受けている女性がいます。彼女がクリスチャンです。そして旦那がいつも、暴力を言葉によっても、拳によっても行ないます。けれども、彼女は「私はクリスチャンだから、夫の罪を許さないといけない。」と思います。そしてひたすら我慢するのです。そして教会でも、ややもすると、その姉妹に「許さないね」と言うのです。これはとんでもない間違いです。本人が罪を犯しているのを神が、許容するはずなどありません。神は決して罪を見逃されない方です。その行ったことに対して、必ず報われる方です。許容の意味での許しは、一切ないのです。しかし、もしその夫が自分のした悪事に気づき、深く反省し、悔い改めているのであれば、どうでしょうか？

その行ったことについて、女性はキリストの命令に従い、その一切の悪事を赦します。もう、過去を持ち出して彼を責め立てません。罪の赦しというのは、飽くまでもその罪を犯したのだと認め、悔い改めているからこそ行うことができます。悔い改めないのであれば、その罪を許容してはなりません。DVの相談センターに連絡するとか、警察に通報して、自分のしていることを知らないといけないのです。

### 1B 罪の対価

罪の赦しを知るには、当然ながら罪を知らないといけません。ある人たちは、罪を知らないといけないというと、まだ赦されていないというのですか？と言います。いいえ、自分が罪を犯したことを知らなければ、赦しの豊かさなど知りようがありません。まず、罪を知り、また罪には対価があることを知る必要があります。初めに神が語られたのは、これです。「しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。(創世 2:17)」必ず死ぬ、とありますね。また、主はモーゼのご自分を現わされた時に、「恵みを千代にまで保ち、咎と背きと罪を赦す。しかし、罰すべき者を必ず罰して、父の咎を子に、さらに子の子に、三代、四代に報いる者である。(出エジプト 33:7)」罰すべき物を必ず罰すると言われます。そして、「罪をおかしたたましいが死ぬ(エゼキエル 18:20)」とあります。

### 2B 責めるのは愛すること

ですから、罪の赦しのためには、まずは罪の指摘が必要なのです。それがあって初めて、罪の赦しをすることができます。そこで、ペテロが七回赦せばいいですかと尋ねる前に、イエス様は、罪を指摘しなさい、責めないさいと言われていたのです。「もしあなたの兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで指摘しなさい。その人があなたの言うことを聞き入れるなら、あなたは自分の兄弟を得たこととなります。(マタイ 18:15)」以前の第二版ですと、ここの「指摘」が責めるとなっています。それはいわゆる責め立てるということではなく、まさに指摘するということです。

罪を責めるとか、罪を指摘するということは、罪に定めることではありません。裁くことでもありません。愛がないというのであれば、それは全く違います。レビ記において、隣人を愛しなさいという命令がありますが、こう書いてあるのです。「19:17-18 心の中で自分の兄弟を憎んではならない。同胞をよく戒めなければならない。そうすれば、彼のゆえに罪責を負うことはない。あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは【主】である。」心の中で兄弟を憎むことのないように、よく戒めなさいということです。これは罪を指摘しなさいということです。そして復讐してはならない、恨んではならない、隣人を愛しなさいという命令です。戒めるということをしなからこそ、憎しみや恨みをそのままにしています。そして、戒めるからこそ兄弟を愛することができます。

イエス様の言葉には、そういった言葉がたくさんありました。ペテロが、そんなことがあってはいけませんと言った時に、「退け、サタン」と言ったのです！今のご時世、キリスト教会の中でも言葉狩りがあるかもしれません。こういう言葉は人を傷つける、とかいうものです。イエス様はかつて、「10:33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも、天におられるわたしの父の前で、その人を知らないと言います。」と言われました。しかし、カヤパ邸でペテロが、イエス様のことを知らない、三度も言いました！ペテロは、父なる神の前で、イエス様から知らないなどと言われているのでしょうか？いいえ、これほどイエス様の言葉が厳しいにも関わらず、彼は豊かな罪の赦しを得たのです。

### **3A 赦さない心**

#### **1B 十字架は神の義と愛の交差点**

ですから、罪の赦しや罪を指摘するという事を見て行く時に、私たちは、キリストの十字架の深みを知ることにます。罪は、それを犯した人は死ななければいけません。過ちを犯したら、それなりの対価があります。しかし、死ななければいけないほどの罪を身代わりに受けたというところに、神の愛があり、赦しがあります。私たちが、この罪と言う問題、そして赦しという福音の中で、十字架がいかに必要か、その深みを知り、新鮮な思いで十字架を眺めることができるでしょう。罪を覆い隠したら、あるいは曖昧にしたら、十字架も見えなくなります。「詩篇 85:10 恵みとまこととはともに会い 義と平和は口づけします。」ここには、二つの相容れないものが出会っている姿があります。恵みとまこと、つまり真理です。そして義と平和です。義があるところには、裁きがあります。けれども平和が来ていると言います。それは、キリストによって可能です。神の真理があるけれども、キリストの十字架によって私たちに恵みがあります。神の義があるけれども、神が戦われるのではなく、既にその敵意はキリストの十字架で取り除かれ、今は神と平和を持っています。

#### **2B 心の監獄**

この大借金をしていた家来のことを思い出してください。彼は、負債を返すまで彼を獄吏に送りました。これは、赦さない者の特徴を表しています。赦さない人は、まるで心に鎖が繋がれているようです。解放されていません。しかし、赦さないことによって自分の精神や健康まで損なうことさえあります。しかし、赦すということは自分を解放します。癒されます。